

『光る君へ 8』

契りきな かたみに袖を 絞りつつ 末の松山 波越さじとは

きよはらのもとすけ
清原元輔

【現代訳】

約束したのにね、何度もうれし涙にぬれた袖を絞りながら。末の松山（宮城県多賀城市）を波が越すなんてあり得ないように、決して心変わりはないと。

末の松山という地名は歌枕です。千年以上昔の貞観地震等から平成 23 年（2011 年）の東日本大震災のときまでも津波はここを越していません。そのため、絶対にあり得ない例えとして使われます。

この歌は清少納言の父・清原元輔がふられた男の代わりに詠みました。元輔は天延 2 年（974 年）には周防守として防府市へ赴任し、銭を鑄造する鑄銭司の長官も務め、最後は肥後守として熊本県で亡くなりました。

ドラマでは藤原為時（紫式部の父）と共に漢詩の会を催し、そこで若き道長や公任たちが学ぶ場面や、清少納言が宮仕えをしていて熊本へついて行かなかったことを悔いる場面もありました。幼い頃の清少納言は周防国へついて来ていたのでしょうか？

山陽小野田かるた協会 久保 久美子